

Logitant Website Report No. 8

J. M. ケインズ著書の一節にみる拙著理念・哲学との整合性

株式会社ロジタント代表取締役 吉田祐起

平成18(2006)年4月

2004年4月に出版した拙著「トラックドライバー帝王学のすすめ～“ザ・プロフェッショナルズ”への教科書～」(文芸社刊 四六判 全364頁)を読んでくださった異業種企業の友人経営者が、こんなことを言ってくださいました。「…吉田さんが本書で貫いている理念や哲学は、かの20世紀最大の経済学者であるJ. M. ケインズが著書で書いている一節に合致しますね…」と。

安岡正篤著「活学としての東洋思想 人はいかに生きるべきか」(PHP文庫刊)が紹介する一節(207頁)です。曰く「…あのケインズなんかもそうです。ケインズ絶筆『わが若き日の信念』の中にわれわれには It is much more important how to be rather than how to do. 如何に成すべきかということよりは如何にあるべきかということが大事だと言っている…」がそれです。

凝り性の私は、この原書 My Early Beliefs をインターネットで捜し求めて手に入れました。何せ、半世紀前に絶版した「古書」です。ケインズの死後に出版されたもので、表紙はさすがに年輪を感じさせます。わずか106頁ものですが、ン万円のシロモノです。むさぼるように一気に読破しました。と、どうでしょう、くだんの一節が無いのです！ 安岡大先生ともあろうご人物が事実無根のことを書かれるハズは無い！ 他の著書と勘違いされた結果では…、と思っているのですが、あの手この手でその出所を探索中です。

それはさて置き、この言葉に強く共感した私は、ドライバー教育の際は申すに及ばず、社団法人広島県安全運転管理協議会「法定講習」専任講師として、はたまた、昨年から発生している厚労省関連主催の「就職支援セミナー」や、「一般企業社員研修」関連レクチャーでも、このケインズの言葉をよく引用しています。

ほかでもありません、私の持論である「ホンモノのドライバー(人間)教育は『スキル(運転技術)』でなく、『ウィル(心がけ)』にある」としているからです。ケインズのこの言葉と、この私の持論は全く「同質」のものと確信するゆえに、このケインズの言葉を引用しているのです。

ケインズのこの言葉を借りてドライバー教育に例をとれば、次の如くなるでしょう。「how to do⇒how to drive (well) ⇒運転上手になる⇒スキル(運転技術)」に対して、「how to be⇒how to be a good driver⇒良き運転者になる⇒ウィル(心がけ)」です。

社会問題になっているドライバーの飲酒運転防止対策が良い例ですが、これは断じて how to do が解決する問題ではあり得ません。自身の運転技術を過信し、酒に滅法強いと自惚れ、少々飲んでいてもハンドルは狂わない、バレなければイイさ、とうそぶく輩の「誤れる心がけ」がその元凶。罰金刑や免許停止処分といった防止策(対症療法)である how to do では自他共に飲酒運転は止められません。

一方、「how to be (a good driver) (良き運転者になる)」を目指す者は、飲酒運転は反社会的行為だから断じて飲んだら乗らない、と自覚する「良き人間性」の持ち主です。運転の上手下手には全く関係の無いドライバーズ・マインドです。常識ある人間の「心がけ」の問題です。

折しも、平成18年度交通安全スローガン(内閣総理大臣賞・運転者[同乗者を含む]向け)が発表されました。曰く「思いやる 心ひとつで 事故はゼロ」。「思いやる」も「心ひとつで」も how to be。ホンモノ思考性がこんなところにも芽生えはじめたことは喜ばしい限りです。

関連講演の折に、この思想にマッチするものとして、よく引き合いに出す言葉があります。自動車メーカー・マツダのある技術職人さんの弁。2007年問題(団塊世代の退職による人材不足)を前にしたNHKテレビの取材に応じる場面でのことです。定年を迎えてリタイアされる立場にあつて、後継者育成のために囑託定年延長される方ですが、向けられたマイクにこう答えられました。「…モノづくりより、ヒトづくりが大事ですよ…」と。名工と呼ばれ、人間国宝と呼ばれる人物が達成された技術や芸術の域は、単なる小手先の技術習得だけではありません。大きな価値観や使命感で裏づけされた、その人物の人間性や人格がその裏づけだと確信します。

how to be への再認識が求められる所以ですが、職業人のみならず、企業理念にもこの精神が見られます。かの最高技術はその最先端をゆくトヨタ自動車のモットーは(も)「モノづくりは ヒトづくり」です。

拝金主義とコテンパーに叩かれているホリエモンとて、how to make money (金稼ぎ)の「生き急ぎすぎ」から、how to be rich (名実ともに裕福人になること)への余裕の選択肢があつたら…と、悔やまれます。

ところで、そうした how to be を教えるに相応しい人物が少なくなりました。いわゆる「人生の師」と称すべき先輩格・年配者で、勇気と情熱をもってそうしたことを提言する人達の不在が気になります。

本来ならば家庭や学校教育の場がそれであるべきですが、悲しいかな現状は深刻です。とすれば、信賞必罰の職場こそが人間教育の絶好の場であると考えます。「経営者は『教育者』たれ！」と力説する満74歳の私ですが、この分野への助言活動は天が与え給うた役割の一つである、と僭越ながら感じる昨今です。